

本書は、予備校受験のために上京した受験生・孝史が宿泊するホテルが火災に見舞われ、時間旅行の能力を持つ男に救助されたことから始まる物語です。男に連れられて降り立ったのは、昭和十一年二月二十六日。まさに二・二六事件が起きようとしていた東京。しかし、この物語は、現代に暮らす者がタイムトラベラーとして過去に戻り、いたずらに歴史を引っかけ回すというものではありません。歴史を真つ正面から捉え、昭和十一年に暮らす人々の中に溶け込み、様々な事件を通して心を通わせてゆきます。そして孝史が現代（昭和六十四年）に帰ってきてから、ひとときを共にした人々を追ってゆきます。全ての人はこの世にはいなかったけれど、戦中、戦後の約50年を一生懸命生き抜いた人々の足跡が確かにあり、別の時間旅行を感じ、楽しむことができました。

また、『この時代は、働くことの意味が「現代」よりも、もつとずつとずつと素朴ではつきりしていただろう。（中略）煙草一個売って釣り銭を受け取ることに、それにふさわしいだけの重みがあったのだ』という一文にもハッとさせられました。現在、便利さを享受している中で、何か空虚さを感じていたのは、この「重み」だったんだと。人と人との重みは温かさ。意志を伝えるのにパソコンや携帯のメールではなく、電話や直接あって伝えた方が、気持ちが伝わる。当たり前のことだけでも、避けがちなことを改めて感じました。

Y・C・



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞